平成２０年１月２８日発行

奄美野生生物保護センター
季刊ニュースレター

奄美の風だより

Vol.8　No.2(冬号)
通巻 31 号

奄美自然体験活動推進協議会
〒 894－3104
鹿児島県大島郡大和村思勝551
奄美野生生物保護センター
TEL: 0997-55-8620　FAX: 0997-55-8621
E-mail: amami_rabbit@nifty.com

みなさま、寒中お見舞い申し上げます。毎日寒い日が続きますね。また、晴れる日があまりなく、雨が降ったりやんだりと良い天気になかなか恵まれません。洗濯物は部屋干し、布団はなかなか干せないなどと、憂鬱な日々が続きます。

さて、前回の風だよりで、訪れる冬鳥の数は一年おきに多い年と少ない年がくるようです、という話をしましたが、今年は多くもなく少なくもなく冬鳥が渡来してきたようです。（ということは、「一年おきに」という話は違うのでしょうか？）しかし、なかなか冬鳥を写真におさめる機会に恵まれず、サシバを数枚だけ撮影するに留まりました。こんなことでは冬号に載せる写真がない･･･どうすれば･･･と悩んでいたのですが、奄美野生生物保護センターの近くにある大和浜のオキナワウラジロガシが、国の天然記念物に指定されることになったのを思い出し、さっそく撮りに行きました。場所はセンターからオキナワウラジロガシのある山の入り口まで歩いて約 10 分、そこからゆっくり登って 15 分ととても近場にあったのですが、見に行ったのは今回が初めてでした。見てビックリでした。とても大きく立派ではないですか！

奄美で、樹高 15m・幹周り 3.82m・直径約 1mにもなる大木はあまり見られないのではないでしょうか。奄美では、戦後の森林伐採の影響で二次林が多く、比較的若い木が多いようです。そのような島で、こぶがいくつもできた歴史を感じさせる幹と太くのびた枝を持つ老木は、見る者を圧倒させます。

天然記念物に指定されることになったオキナワウラジロガシ →

この大きなオキナワウラジロガシの根元の周りには、数本の若い木が囲うように生えていました。また、この大木の根の上に根を張り生長しているオキナワウラジロガシもありました。みんな大木の子どもたちなのでしょう。

これから数十年後数百年後、このオキナワウラジロガシはどんな姿になっているのでしょうか。大木の周りに芽吹いた若い木々は生長を続け、老木を囲むように生育しているのでしょうか。根の上に根を張った木は何百年後には大木とくっついて１本の木となるのでしょうか。想像がふくらみ、数百年後の姿を見てみたいと叶わぬ夢をみてしまいます。せめて私たちが見ることが出来ない数百年後も、このオキナワウラジロガシがある山が、今までのように地域に親しまれた神山として守られ、住民たちを守り続けてくれることを祈ります。

環境省奄美野生生物保護センターと協議会から

「ツシマヤマネコ展」のお知らせ

【趣旨】

ツシマヤマネコは、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」に基づく「国内希少野生動植物種」に指定され、また、環境省のレッドデータブックにおいても絶滅危惧 IA 類とされており、日本で最も絶滅のおそれの高い哺乳類の一種です。その生息数は、1960 年代には 250～300 頭でしたが、生息適地の減少や交通事故等が原因で、1980 年代には 100～140 頭、1990 年代には 90～130 頭、2000 年代前半には 80～110 頭と減少傾向が続いています。

ツシマヤマネコ保護のためには、地域住民をはじめ島内外の方々の理解と協力が必要不可欠であることから、奄美野生生物保護センターの姉妹施設である対馬野生生物保護センター（以下、TWCC）では平成９年開所以来、自然観察会やシンポジウムの開催等、積極的に普及啓発活動に取り組んでいます。

その一環として、TWCC 館内では、展示や映像、ツシマヤマネコの生体等により来館者への普及啓発を行っていますが、TWCC が対馬の最西北端に位置するという地理的制約を受け、来館さえ難しいという住民や観光者は少なくない状況です。

ツシマヤマネコの生態や保護活動をより広く知ってもらうためには、TWCC 内の展示のみならず、島内外の人が多く集まる公共施設等における PR が重要であることから、「ツシマヤマネコ展」を開催することとしました。

【主催】・環境省奄美野生生物保護センター
　　・奄美自然体験活動推進協議会

【日程】

平成２０年２月５日（火）～２月２９日（金）

【場所】環境省奄美野生生物保護センター　企画展示室

協議会活動報告

第8回　やせいのいきもの絵画展

～テーマ～「わたしが見つけた奄美の宝」

展示期間：平成19年12月1日（土）～ 平成20年1月31日（木）

表彰式

賞状授与

集合写真

「第８回やせいのいきもの絵画展」が、奄美自然体験活動推進協議会と環境省奄美野生生物保護センターの共催で行われています。

奄美の島々には深い森があり、まわりには美しい海が広がっています。そしてそこにはさまざまな生きものたちがくらしています。そのような素晴らしい自然は、島に住む人たちだけでなく人類にとってかけがえのない“宝”だと思います。

今回、やせいのいきもの絵画展では、「わたしが見つけた奄美の宝」をテーマに、自分たちが“奄美の宝”だと思う生きものや、風景を描いてもらいました。

奄美群島内の１６の学校から１４９点（個人での応募も含む）の作品が寄せられ、ユニークな視点で捉えたハブやルリカケスなど、多種多様な“奄美の宝”が集まりました。そしてその中から、いきもの大賞（２名）・あざやか賞（４名）・ユニーク賞（４名）・審査員特別賞（２名）を選出しました。

絵画展初日には表彰式があり、協議会会長の永田武光大和村長から入賞者に賞状と副賞が授与されました。（※今回の副賞は入賞した作品を掲載したカレンダーを制作しました。）

また、「みなさんは奄美の中で何が大切なのか考え、動物・植物など色々とありますが、それらの生きたちたちを自分なりに心を込めて絵に表し、すばらしい作品に仕上げました。」と会長から挨拶がありました。

応募していただいたすべての作品を奄美野生生物保護センターにて、１月３１日（木）まで展示しています。

次の２ページで入賞した作品を紹介します。子どもたちが描いた、たくさんの宝がつまった作品をご覧下さい。

制作したカレンダー

第8回　やせいのいきもの絵画展　入賞者作品

☆ いきもの大賞

●**高学年の部**

坂本　晃樹（奄美市立朝日中学校１年）
「イセエビと枝サンゴ」

●**低学年の部**

猿渡　絵里（宇検村立久志小学校２年）
「ヒカゲヘゴにみんな大集合」

☆ あざやか賞

●**低学年の部**

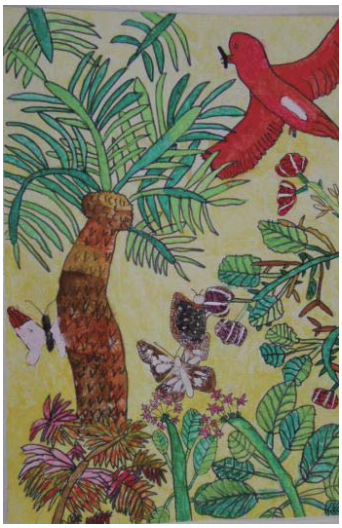
川原園　紘也（大和村立大和小学校３年）
「きれいな鳥たち」

西　柚香奈（奄美市立知根小学校２年）
「銀ハブ」

●**高学年の部**

武原　みのり（大和村立大和中学校３年）
「アカショウビンと森で」

川口　愛（奄美市立宇宿小学校６年）
「奄美の自然で生きる動物」



☆ ユニーク賞

●低学年の部

東崎　翔太（喜界町立阿伝小学校３年）
「ハブと出会ってさあ大変！！」

高島　洋（大和村立湯湾釜分校１年）
「森の生きものといっしょに」

●高学年の部

平　妃華莉（喜界町立阿伝小学校４年）
「夜行貝見いつけたっ！！」

梶原　雪花（大和村立大和小学校４年）
「華麗なるオーストンオオアカゲラ」

☆ 審査員特別賞

久保　良太郎（奄美市立知根小学校３年）
「奄美のハブ」

平田　隆之辰（奄美市立宇宿小学校５年）
「マングローブの生き物」

大島新聞

H19. 12. 2(日)

H19.12.2 大島5

やせいのいきもの絵画展

149人の「宝」選ぶ

第8回「やせいのいきもの絵画展」（環境省奄美野生生物保護センター・奄美自然環境推進協議会主催）の表彰式が1日、大和村の同センター企画展示室であった。奄美群島の小中学生から149点の応募があり、入賞者12人を選考。「いきもの大賞」には、猿渡絵里さん＝宇検村立久志小2年＝の「ヒカゲヘゴに大集合」と、坂本晃樹くん＝奄美市立朝日中1年＝の「イセエビと枝サンゴ」が輝いた。

同協議会の永田武光会長（大和村長）は「わたしが見つけた奄美の宝」のテーマに沿って、奄美の生き物、大切な宝は何かを考え、自分なりに絵に表したすばらしい作品ばかり。世界に誇れるような奄美の自然を大切にする思いを持って、しっかりと学んでがんばってほしい」とあいさつ。賞状と、副賞として全入賞作品を使った特製カレンダーを手渡した。

同センター・自然保護官の鶴雅哉さんは「みなさんが奄美を描きたいという気持ちを持っていることがうれしい。絵画展のほかにも体験活動やクラフト展も実施しているので、ぜひ参加してほしい」と呼びかけた。

「いきもの大賞」に選ばれた猿渡さん（8）は「ヒカゲヘゴはダイナミックだから選んだ。チョウやキノボリトカゲ、アカショウビンは、よく見る大好きな生き物。キノボリトカゲが一番好き」と感想を話した。

今回応募された全作品は、1月31日まで展示している。

大賞以外の入賞者は次の通り。（敬称略）

【あざやか賞】＝川原園紘也「きれいな鳥たち」（大和小3年）、西柚香奈「銀ハブ」（知根小2年）、武原みのり「アカショウビンと森で」（大和中3年）、川口愛「奄美の自然で生きる動物」（宇宿小6年）▽

「やせいのいきもの絵画展」で入賞した子どもたち

南海日日新聞

H19. 12. 2(日)

H19.12.2 南海5

入賞者12人を表彰

「やせいのいきもの絵画展」始まる

奄美野生生物保護センター

奄美自然体験活動推進協議会などが主催する自然ふれあい行事「第八回やせいのいきもの絵画展」が一日、大和村の奄美野生生物保護センターで始まった。開幕初日は表彰式があり、入賞者十二人に賞状や記念品が贈られた。絵画展は来年一月三十一日まで開かれる。（入賞作品は七日付で掲載）

表彰式には受賞者ほか、保護者らも出席。永田武光大和村村長から一人ひとりに賞状が手渡された。いきもの大賞に選ばれた猿渡絵里さん（久志小二年）、坂本晃樹君（朝日中一年）は「写真や本物を見て上手に描けた。今度はクロウサギも描いてみたい」「自分の気持ちが入った作品に仕上がった。表彰式は少し緊張したけどうれしかった」と感想を述べた。

同展は未来を担う子供たちに奄美の自然について興味を持ってもらうことなどが目的。奄美群島内から百四十九点の力作が寄せられた。

賞状を手に喜びを見せる受賞者たち

●月夜のアマミヤマシギ●

昨年の「奄美の風だより」冬号（2007 年 1 月 10 日発行）で、アクティブレンジャーの迫田さんがアマミヤマシギの紹介をしてくれました。今回は、アマミヤマシギとお月さまの意外な関係についてお話ししたいと思います。

アマミヤマシギは、奄美諸島と沖縄諸島の一部にだけ生息しているシギ科の鳥類です。生息地が限られており、個体数も多くはないと考えられるので、環境省のレッドデータブックでは「絶滅危惧ⅠB 類」に分類されていました。ところが、2006 年に絶滅危惧種の見直しが行われ、アマミヤマシギは「絶滅危惧Ⅱ類」になりました。この見直しは、簡単にいうと「絶滅の危険性が減った」ことを意味しています。その理由として、環境省は「森林植生の回復による生息環境の改善傾向という要因とともに、信頼のできるデータが多く集積されたという面が大きい」と説明しています。つまり、この鳥の生息状況についてきちんと調べてきたことが、絶滅の危険性を評価する際に役に立ったというわけです。この「信頼できるデータ」は「アマミヤマシギ保護増殖事業」で得られたものです。この事業は、環境省が NPO 法人奄美野鳥の会に委託し、奄美野生生物保護センターと協力して行っているものです。

図１．アマミヤマシギ。色のついた足環が見えます。色の異なる足環をつけることで、個々の鳥を見分けることが可能になります。

さて前置きが長くなりましたが、この「アマミヤマシギ保護増殖事業」の一環として、奄美野鳥の会では、奄美大島の龍郷町市里原地区においてアマミヤマシギの夜間調査を月に 5～8 回の頻度で行ってきました。アマミヤマシギは、昼間は森のなかでじっとしているため目立ちませんが、夜になると林道上に出てきます。この林道に出現したアマミヤマシギの数を、調査のたびに数えたのです。2006 年２月から翌年１月にかけての１回の調査あたりの平均出現数は、図２のようになりました。アマミヤマシギが繁殖し、若鳥が分散するまでの２月から８月の間は出現数が多く、９月から１月には少ないことがわかります。では、１回の調査における出現数はどんな要因によって左右されているのでしょうか。アマミヤマシギの出現に影響を与えそうな環境要因としては、気温、風速、くもり具合（雲の量）、月齢などが考えられます。また、調査を行った時間帯（日が暮れてすぐなのか、それとも明け方近くなのか）によっても出現する数は違うかもし

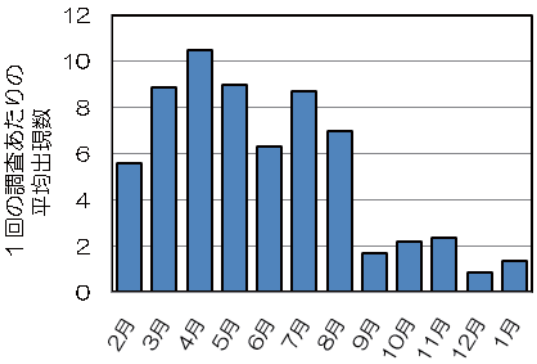


図２．市里原地区におけるアマミヤマシギの出現数の季節変化（2006 年２月～2007 年１月）。

れません。これらの要因のうち、どれがアマミヤマシギの出現数に影響を与えているかを分析してみました。すると、雲の量と月齢が出現数に影響していることがわかりました。雲が少なく月齢が 15 に近い夜に、アマミヤマシギの出現数が多いという結果になったのです（図３）。雲の量が多ければ、当然月が隠されてしまう可能性が高くなるので、雲の量も間接的に月の明るさに影響する要因であると言えます。つまり、アマミヤマシギは満月に近い晴れた晩に、林道上に多く出てきている、ということになります。

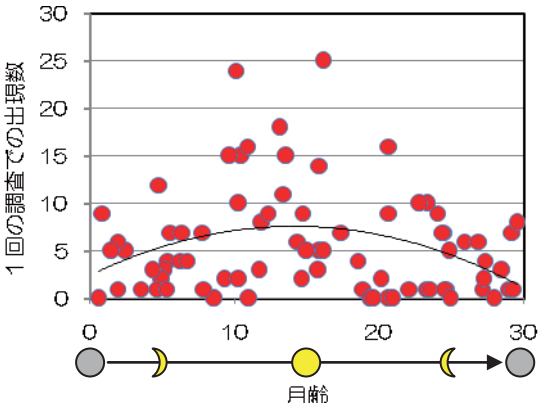


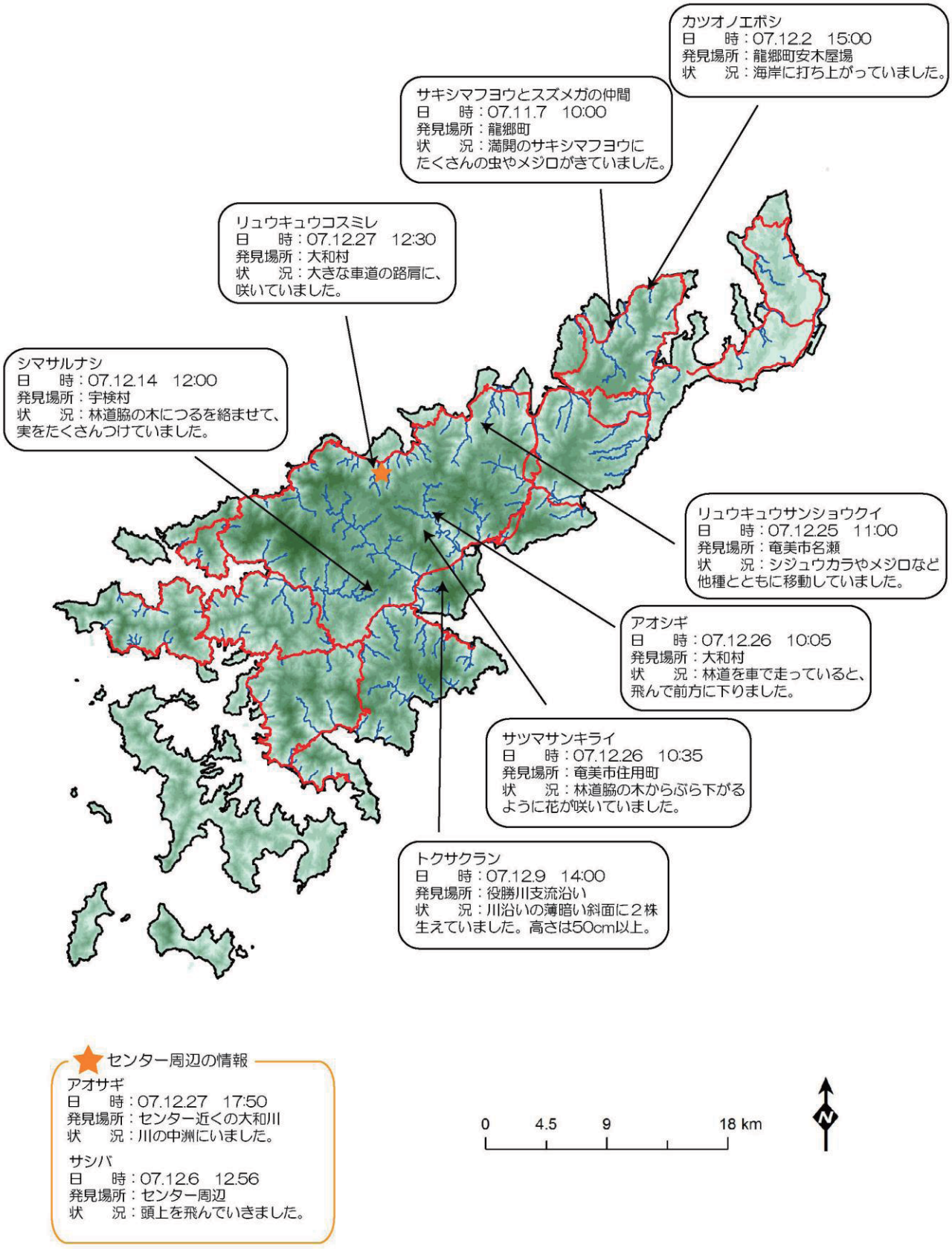
図３. 月齢とアマミヤマシギの出現数の関係。月齢 15（満月）付近で出現数が多いことがわかります。

ではなぜアマミヤマシギは、月の明るい晩に林道上に出てくるのでしょうか。そもそも林道でなにをしているのでしょう。林道にいるアマミヤマシギは、たいていの場合ぼーっと立っているだけのように見えます。でもライトを暗くしてしばらく待っていると、林道上を歩いて地面をつつく行動が見られることもあります。おそらく、アマミヤマシギは夜の林道上でミミズなどの食べ物を探しているのでしょう。アマミヤマシギは、食べ物を探す際にくちばしの感覚（触覚）と目（視覚）使っていると考えられます。まわりが明るければ当然目で食べ物を見つけやすくなるでしょう。つまり、アマミヤマシギが月の明るい晩に林道上に多く出てくるのは、明るい晩には林道で食べ物を見つけやすいからなのではないか、と考えることができます。シギやチドリなど、水辺に住む鳥の仲間には、昼だけでなく夜にも食べ物を探す習性をもつ種がいます。これらの鳥も、触覚や視覚を使って食べ物を探しますが、視覚を使う種では、月が明るいほど食べ物を見つける効率がよくなることが知られています。おそらくアマミヤマシギも、月の明るい夜には林道でたくさんの食べ物を見つけることができるのでしょう。満月の夜は林道に出るとたくさんの食べ物が食べられる－アマミヤマシギとお月さまには、そんな関係があったのです。

この調査で、アマミヤマシギの生活が月齢（月の明るさ）によって影響を受けていることがわかりました。生き物をよく調べてみると、このように今までわかっていなかった意外な事実が明らかになることがあります。このようなささやかな「発見」は、生き物の調査をする楽しみのひとつです。みなさんも月夜の晩に、ちょっと夜更かししてアマミヤマシギを探しに出かけてみませんか。思いがけない「発見」が待っているかもしれません。あ、でも車の運転はくれぐれも慎重に。夜の林道には、アマミヤマシギをはじめ、アマミノクロウサギ、各種のカエルやヘビなど、いろんな生き物が出てきています。スピードを出しすぎてこれらの生き物をひいてしまわないように、じゅうぶん注意して運転してください。

（アクティングレンジャー　水田拓）

奄美大島生きもの情報（寄せられた情報の一部）



冬に見られる野生生物

ウラジロガシ【ブナ科】

葉裏が白いのでこの名がある。高さが２０m以上になる常緑高木。葉は互生し、長さ２ｃmほどの葉柄がある。ドングリは２年目に熟し、やや小粒で長さ１．５ｃmほど。

今年はドングリが豊作のようです。道路に大量のドングリが落ちていて、木には鳥が集まっていました。

分布：本州、四国、九州、沖縄

ヒメハブとリュウキュウアカガエル

ヒメハブ【クサリヘビ科】

大きさは３０～８０ｃm。夜行性で主にカエル類をエサにする。

リュウキュウアカガエル【アカガエル科】

大きさは３４～５０mm。繁殖期は１１～５月。道のくぼみ、木のうろなど、様々な場所にできた水たまりや渓流に卵を産む。

ヒメハブが夜、大きな水たまりの中にひそみ、顔だけを水面から出していました。産卵しにくるカエルをねらっているようです。１５分後、同じみずたまりにリュウキュウアカガエルが現れました。この後、無事に産卵までこぎつけたかどうか不明です。

参考文献

琉球弧　野山の花（南方新書　写真と文：片野田逸郎　監修：大野照良）

奄美のカエル図鑑（奄美自然体験活動推進協議会・奄美野生生物保護センター）

樹木【秋冬編】（山渓フィールドブック　著：永田芳男）

日本の両生爬虫類（平凡社　写真・解説：内山りょう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎）

編集後記

つい先日、岩手県の盛岡に行ってきました。最高気温－2℃最低気温－10℃と久しぶりに「骨まで凍みる寒さ」を体感してきました。そんな寒さを体感して奄美に帰ってくると、「全然寒くない。コートがなくても過ごしていける。さすが南の島！」と思っていたのですが･･･。数日経ち、奄美の環境に体が慣れてしまうととても寒いです。コートが欲しい！と思ってしまいました。人間は環境に慣れるのが意外に早いですね～。数日ですっかり南の島の人間に戻ってしまいました。早く暖かい日差しの中、ボーっとしたいと思う今日この頃です。